

No.9. 2021. 11. 30

色彩とは何でしょうか？

私たちは、朝目覚めてから夜寝るまでに様々な色を目にします。それは自然界のものから人工的なものまで、何百、何千、という色彩に囲まれて生活しています。自然界の色彩は一日を通して、微妙に表情を変化させていきます。また一年を通じて、季節の雰囲気ごとに色彩が一日一日と変化していきます。そんな外側に表れている色彩のほかに、私たちはある色彩に触れる時、何らかの気分や感情がわいてくることがあります。優しい気持ちになったり、あるいは勇気をもったり。またある色に特別な親近感が湧いたり、またいやな気持ちを持ってしまうこともあるかもしれません。また言葉の表現の中にも、「ブルーな気分」、「黄色い声援」というように、色彩を心の表現、または雰囲気にあてはめて使うこともあります。

この当たり前のように私たちの周りに存在している色彩。こんなに身近に存在する色彩ですが、実は私たちはこの“色彩自体”には触れることはできないのです。“緑色の葉っぱ”には触れることはできるけれど、緑“色”自体には触れることはできないのです。

この身近で不思議な存在、色彩とは一体何でしょうか？

この疑問にある側面から答えを出した人がいます。ニュートンさんです。あのリンゴが落ちたのを見て、万有引力の法則を発見した物理学者のニュートンです。

ニュートンは光にはさまざまな波長が存在するという視点から、そのさまざまな波長を7つに分け、その波長の違いが私たちの視神経に刺激を与え、その刺激で脳が7色の色彩を認識する、と述べました。別の言い方をすれば、光自体は無色ではあるが、私たちの脳がそれぞれ透明な光の波長を“色”と認識するのであって、色彩は実際には存在していない、ということです。

このニュートンの色彩論…というか私たちが色彩を認識する仕組みが、現代の一般的な色彩論であります。

しかしここで、このニュートンの色彩に対する認識を真っ向から批判した人がいます。ドイツ人のゲーテさんです。ゲーテは“若きウェルテルの悩み”や“ファウスト”などを執筆した文学者で有名ですが、生涯を通じて自然研究に熱を入れていたことでも知られています。そのゲーテにとって色彩は、自然界の中でも特に特別な存在であり、彼は20年もの月日をかけて“色彩論”という本を執筆しています。

その色彩論の著書の冒頭には、“色彩は光の「行為」である”と述べられています。光の「行為」です。つまり、色彩を生きているものとしてとらえているのです。色彩を生きているもの

として体験していたゲーテにとっては、ニュートンの物理的な視点から見た単なる幻影としての色彩論は、我慢がならなかったようです。またゲーテは、色彩を人間の知覚する外側の現象としてとらえただけではなく、私たちの内側にも存在するもの、人間の外と内をつなぐものとしてもとらえていました。

また”闇”へのとらえ方について、両者の異なる主張があります。

ニュートンは光を分析しましたが、”闇”については単なる光の当たらないところ、光の欠如している部分であると、闇をあまり重要視しなかったようです。しかし、ゲーテにとって”闇”とは”光”同様に重要な存在であり、光だけでは色彩は生まれず、また闇だけでも何も生まれず、光と闇が会って初めて色彩が生まれる、と述べています。ちなみに古代ギリシャの哲学者アリストテレスも同様に「色は光と闇、白と黒の間から生じる」と述べています。

さて、ぴっぴの森の子どもたちにとっての色彩とは何でしょうか？こどもたちは、どのように色彩をとらえているのでしょうか・・・？

ここで少し、「色の時間」について触れてみたいと思います。

「色の時間」では、水彩の絵の具を使用し、濡れた紙に色彩を置いていきます。ちなみに、黄・青・赤の3色のみを使用しています。(…3色のみ？と思うかもしれませんが、この3色で世界中のありとあらゆる色彩が生み出されるのです。…)

絵の具に慣れていない最初のころは、一つひとつの色、例えば黄色を体験します。黄色とお友達になります。そして黄色の体験を十分にしたのち、今度はほかの色、例えば青色が登場します。全く性質の違う2つの色が紙の上で混ざり合い、全く別の色”緑”が誕生します。その瞬間は驚きです！私たち大人にとっては、それは当たり前のこととして”知っている”ことです。でもそれを純粋に体験するこどもたちにとっては、それは大きな驚きと発見と喜びです。

また、それぞれの色の体験も異なります。赤い絵の具を見た瞬間に”熱い！”という子がいました。また、少し寒い日に青色を描いたところ、”寒くなるからいやだ。”という子もいました。こどもたちにとって、色彩とは単なる脳の幻影なのではなく、実感の伴う事実なのです。

子どもたちは色彩と”一体”になります。そして目の前で繰り広げられる色彩とともに、様々な体験をします。それは、おともだちと交流している中で、楽しかったり、嬉しかったり、時には悲しかったりすることと同じ体験なのです。

さて、皆さんにとって色彩とは何でしょうか？

ニュートン的な一種の”光の幻影”としての色彩への視点、ゲーテの光と闇の「行為」である”生きている色彩”への視点で、改めて色彩と自分を眺めてみるのも良いかもしれません。あるいは、ぴっぴの子どもたちのように、色彩たちと一体となり、ただただ遊んでみるのも面白いかもしれません…

# 森のみちくさおいしいお話し\*

12月

スイカズラの葉  
つる。

長く厳しい冬をのりきるために木の葉集めに  
いっせいにかけ回るリスやカゲスたちの姿が  
みられる頃とよりました。

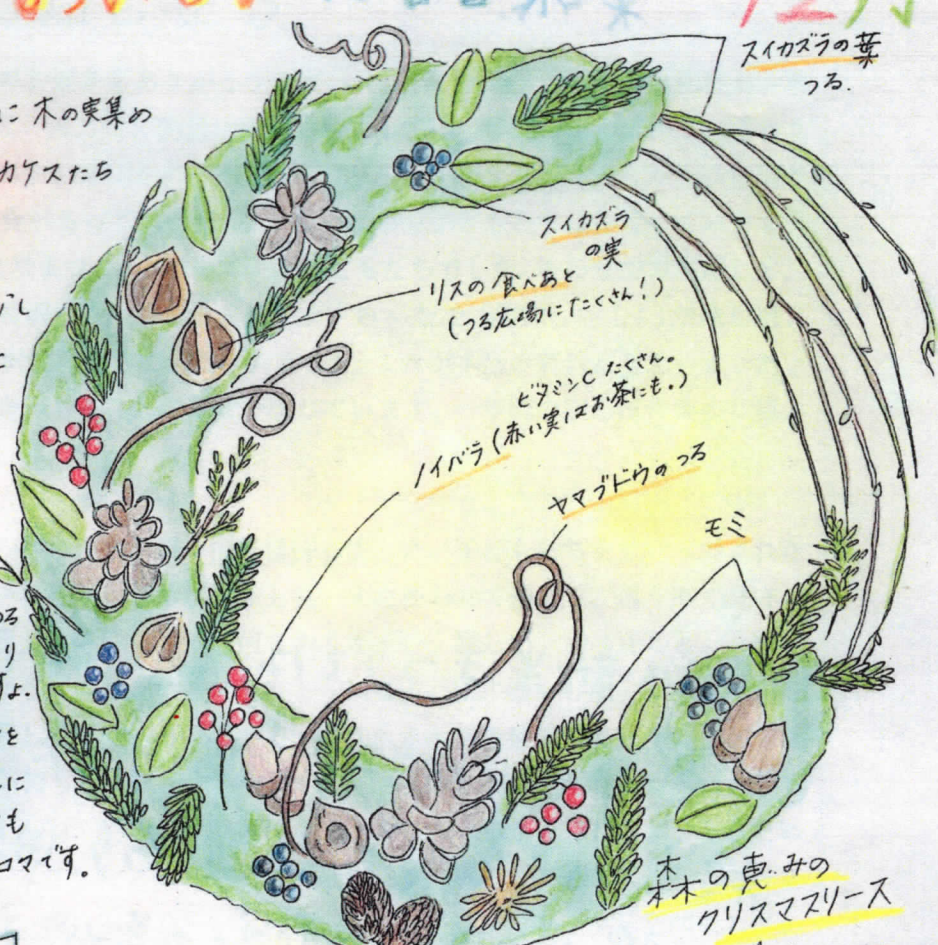
年末はちもこの冬は森の葉みをして  
いただく。寒い季節を元気に  
あたたく、そしておいしく楽しく  
過ごしてみませんか？

葉の葉

## 森の葉みのリース:

土台には スイカズラのつる: 葉のつるの  
苦味分は抗ウイルス作用があり  
咳にも、のどめなどもありですよ。

モミ: 香りは空気を清浄化し、咳を  
鎮めです。枳殻を集めてボウルに  
入れて、熱湯もかけるだけで  
よい香りが出ます。天然のアロマです。



## 森のナッツとみのりの

シトレン: クリスマスを待ち望み期間に

食べるシトレン。この冬はくり。

くるみ、どんぐりなどの森のナッツ



をたっぷり入れて、10月に  
ご紹介したヤマブドウ、ガマズミのドライ

フルーツにして加えた森のみのりのシトレンは

いかがでしょう。

ダンコウバイの枝  
のチャイをそえる  
と体が温まり  
ますよ。

(本ほどあたたまる)

## ダンコウバイのチャイ

ダンコウバイの枝を2cm

ほどにカットして天日干し。

10分ほど煮たします。

豆乳とてんさい糖をお好みで

加えれば寒い季節にぴったりのおいしいチャイの  
できあがり♪ 香りにもいやされずよ! ♪ 冷えにも♪



# たんたん はだけ

先日の新米まつりでは、よい時間を  
どうも ありがとう ございました。

種まきから子どもたちと関わり、田植え、草取り、

稲刈り...とみなさんの手がたくさん加わって  
できた 今年の新米...

飯ごう炊き、羽釜炊き、けんちん汁づくり、

畑の大豆をさやから出して炊いてすてきなごづくり、おもちを  
丸めて 2人さん手作りあんこを和えて...できたてきなこも、など  
いろいろな準備をして、まゆさんのふりかけ、さやかさんと  
ちょうこさんの おつけものとともに ほおほる

幸せな ひとときでした。

“不便を楽しむ”という言葉を耳にしますが、ひとりでは  
大変な“不便”も、わかちあえる人といっしょだと、より  
楽しいんだなあ〜と 感じます。そしてはっ!

あと 11月間に 11月の時間を迎えていました。感謝 感謝  
です。はるこ